

クリスチャンユースのラポール形成に関する質的研究

著者	岡村 直樹
雑誌名	キリストと世界 : 東京基督教大学紀要
巻	22
ページ	78-104
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1131/00000005/

クリスチャンユースのラポール形成に関する質的研究

岡村直樹

(東京基督教大学教授)

1 研究の出発点と意義

アイデンティティー発達理論を提唱したエリクソンによれば、ユース期（主に思春期を指す）とは、「自分は何者で、これからどう生きるか」といった質問の答えを求めつつ、若者のアイデンティティーが形成される、彼らの心理的発達にとって非常に重要な時期である。多くの若者はこの時期に、親を含めた権威者に対する反抗や葛藤を経て、それまでの「依存的関係」ではない、心理的・情緒的自立を目指し、新しい関係性を求めるようになる。また親には打ち明けることの出来ない悩みなどの相談を、「ピアー」と呼ばれる同年代の友人関係に求め、彼らからのアドバイスやサポートを重視するようになる。一方で近年、ユース期のアイデンティティー形成がうまくいかず、社会への適応や、特に安定した対人関係、またそれを構築するために必要なスキルを手に入れることの出来ない若者が急増していると言われている。大学生を対象に実施された人間関係の悩みに関する高井（2008）の研究結果からも、他者との比較による劣等感や自己嫌悪で悩む若者が現代社会に多く存在することが浮かび上がってきた。具体的な悩みとしては、「人見知りである」「自分が他者にどう思われているかが心配」「対人スキルが不足している」また「心を許せる友人の不在」等が挙げられたが、それらは現代日本の若者を象徴する問題でもある⁽¹⁾。Facebook や Twitter といった、IT ベースのソーシャル・ネットワーキングがめざましい進歩を遂げる中で、若者同士の人間的なつながりの希薄さに警鐘を鳴らす者は後を絶たない。60 万人とも 70 万人とも言われる引きこもり人口が増加の一途をたどる中で、若者の精神性の成長という課題は、未だかつて無い重要性を帯びている。

当然クリスチャンユースにとっても同様に重要なこの時期に、彼らの一青年としての、そしてまたクリスチャンとしての成長が、どのような人間関係によって有効

(1) 高井範子「青年期の対人関係の悩みに対する検討」『太成学院大学紀要』10, 太成学院大学, 2008 年, 85-95 頁

にサポートされ、ポジティブな変化を遂げるのかを知ること、若者の救いを祈り求める教会や、若者教育を公共的責任として担うキリスト教系教育機関、また次世代のリーダーの養成を担う神学校にとって非常に重要なことであると考えられる⁽²⁾。

本研究は、グラウンデッドセオリーを用いた質的研究を通して、クリスチャンユース側の視点から見た人間関係、特に彼らのクリスチャンリーダー的存在との間に築かれる、安心感や信頼感のある関係性、いわゆる「ラポールの形成」という観点から、ユースに対してポジティブなインパクトを与えることの出来る、今日のキリスト教会に求められるリーダー像を模索するものである。

2 ラポール形成と自己開示

ラポール（仏語表記 RAPPORT）とは、「疎通性」とも訳され、それは「共通の関心や感情を分かち合っているという感情的な共振れ、共感が成立する」状態を表す⁽³⁾。ラポールは、現在日本において主に心理学の分野で用いられている言葉で、多くの場合それは、カウンセリングの場面におけるカウンセラーとクライアントの間に存在する人間関係等を指す。現代の心理カウンセリングの基礎を築いたカール・ロジャーズが、カウンセラーとクライアントの間に起こるべきラポールの形成は、特にクライアントの側に、カウンセラーに対する安心感、信頼感をもたらし、その後のカウンセリングを効果的に進めるうえで非常に重要な関係性であると述べている通りである⁽⁴⁾。またラポールの形成は、クライアントがカウンセラーに提示する情報の質にも大きな影響を及ぼすと考えられている⁽⁵⁾。クライアントがカウンセラーに対して自らについてオープンに話すという場面は「自己開示」とも呼ばれるが、他者に対する自己開示は、それが心理カウンセリングの場面であるか否かにかかわらず、開示する本人に、心理的、さらには身体的にも良い影響を及ぼすと考えられ

(2) 岡村直樹「クリスチャンユースの信仰成長に関するグラウンデッドセオリーを用いた質的研究」『キリスト教教育論集』18、日本キリスト教教育学会、2010年、1-16頁

(3) 加藤正明他編『新版精神医学事典』弘文堂、1993年、505頁

(4) ロージャズ, C. R., 伊藤博 編訳「サイコセラピの過程」『ロージャズ全集』第4巻第1章、岩崎学術出版社、1966年、3-10頁

(5) 下山晴彦「アセスメントの進め方 (10) 初回面接では何をするのか (1) 協同関係を中心に」『臨床心理学』6(4)、金剛出版、2006年、518-523頁

ている⁽⁶⁾。いわゆる「悩みを打ち明けて気が楽になった。」といった状態である。また当然のことながら、カウンセラーに対してクライアントが自身を明らかにすることによって、カウンセラーはクライアントの状態をさらによく知り、クライアントに対して、さらに有効な働きかけをすることが可能となるのである。自己開示の促進は、心理療法の第一の条件であるとも言われている通りである⁽⁷⁾。

しかし自己開示は容易に起こる現象ではない、「自分の気持ちを相手は受け止めてくれるだろうか」「相手から拒絶されないだろうか」「相談の内容が他者に漏れてしまうのではないだろうか」等の不安がそこにつきまとうからである⁽⁸⁾。たとえ自己を開示する側が、自己開示の有用性を深く認識していたとしても、それを実行に移すことはたやすいことではない。したがって、自己開示をする相手に対する安心感や信頼感を抱いていること、すなわち相手とのラポール形成がそこで重要な鍵となるのである。

近年の日本の若者をとりまく状況の中で、青年期の健全な精神的成長を阻害する要因のひとつに、他者に対する自己開示の欠如を挙げることができるとすれば、自己を開示する相手を持たない、またはラポールが形成された人間関係を築くことのできない若者像がそこから見えてくる。榎本（1999）は、青年期の対人関係における自己開示の度合いを測る研究を行った結果、アイデンティティーの確立（自我同一性の達成）に成功した者は、どのような相手に対しても、自己開示の度合いが高かったという結果を報告している⁽⁹⁾。それは発達心理学的理解における青年期のアイデンティティーの確立と、若者の自己開示行動の間には、密接な因果関係があることを明らかにしている。

一方で、カウンセリングの現場において自己開示を受ける側、すなわちカウンセラーの立場からクライアントとの関係性を考える場合に重要な課題として頻繁に挙げられるのは、クライアントに対する安心感や信頼感ではなく、まずクライアント

(6) Pennebaker, J. W., & Beall, S. K., Confronting a traumatic event: Toward an understanding of inhibition and disease. *Journal of Abnormal Psychology* 95(1986), pp. 274-281.

(7) 榎本博明「自分の話をする」『対人心理学の最前線』松井豊編、サイエンス社、1999年、53頁

(8) Pennebaker & Beall, 274-281.

(9) 榎本博明「自己開示と自我同一性地位の関係について」『中京大学教養論叢』32、中京大学教養論叢編集委員会、1991年、187-229頁

に対する「共感力」、さらには「観察力」である。カウンセラーには、クライアントの話を真剣に傾聴し、また語られたつらさや苦しみに共感しようという姿勢が求められる。受容され、守られた場で、クライアントは自己開示を通して自分の内側と向き合うことが可能となるからである⁽¹⁰⁾。またカウンセリングにおける「共感性」は、クライアントが感じていることをカウンセラー自らも感じるという意味での共感だけではなく、カウンセラーがクライアントに共感していることを、カウンセラーがクライアントに積極的に伝達することも含まれる⁽¹¹⁾。クライアントに対する観察力とは、具体的にはクライアントの言動や様々な変化に対する「気づき」である。クライアントの自己開示を促し、クライアントがカウンセリングを通して、良い結果を得ることが出来るよう、より質の高い情報を引き出しつつ、安心してセッションを続けることが出来るための関係作りが、カウンセラーには求められているからである⁽¹²⁾。したがって、クライアントとカウンセラーの間のラポールとは、同等で相互的な「疎通性」ではなく、それぞれの立場と必要に基づく関係性であり、また二者間のラポールは、職務の一部として、主にカウンセラーの努力によって形成されるべきものであることもわかる。

ラポール形成がカウンセリングに与えるポジティブな効果に関するロジャーズの記述を上記したが、心理カウンセリングにおけるラポール研究の第一人者である同氏は、ラポール形成を、セラピーの過程の第一段階、すなわち一番最初に生じる現象であり、その後の段階を支えていくものであると述べている⁽¹³⁾。ラポールの形成と、クライアントがカウンセラーに提示する情報の質に言及した下山も、カウンセラーが初回面接においてまずしなければならないこととして、ラポールの形成を挙げている。ラポール形成を「信頼感や安心感の涵養」と捉えるならば、それはいったいどのくらいの期間をかけてするものなのだろうかという疑問が生じるが、心理カウンセリングにおいてそれは、初回、または初期の段階（初めの2-3回のセッション）においてある程度成立する関係性として考えられているのである。言い換

(10) 西垣悦代編著『発達・社会からみる人間関係』北大路書房、2009年、62-63頁

(11) Northouse P. G. and Northouse, L. L., *Health Communication*, 2nd edition, Appleton & Lange, 1992.

(12) 馬淵聖二・クスマノ、J「疑似カウンセリング体験における『良い瞬間』について」『上智大学心理学年報』29, 上智大学総合人間科学部心理学科、2005年、43-49頁

(13) Rogers, pp. 3-10.

えれば、心理カウンセリングにおけるラポールの形成は、カウンセリングの知識と経験を積んだ者が、テクニックを駆使し、何年もかけて得るものというよりは、クライアントがカウンセラーに対して抱く第一印象や、初めの数回のセッションの中でクライアントが受けた印象等によって左右されるものであることがわかる。したがってカウンセラーは、自らが相手に与える第一印象や、カウンセリング初期段階の言動に非常に気を遣うのである。本研究においても、研究対象者に対する質問やグループディスカッションを通して、研究対象者のユース期における彼らのリーダー的存在との関係性の、「初期の段階」の部分に焦点が当てられている。

ラポール形成とは、主に心理カウンセリングの分野で研究されている概念であることは前記したが、心理カウンセリングにおけるカウンセラーとクライアントとの関係性は、クリスチャンユースと、彼らをリードする立場にある者との関係性と同等なものではないことは明らかである。心理カウンセラーの職務に就く者は、それなりの教育と訓練を受けた、自らをカウンセラーであるとはっきりと認識する者である。また心理カウンセリングではほとんどの場合、カウンセリングが行われる場所、カウンセリングの方法や、さらにはカウンセラーとクライアントの間に起こるべき関係性までもがガイドライン化されている。一方で心理カウンセリングにおけるカウンセラーの職務やクライアントとの関係性のような厳密さが、クリスチャンユースと、彼らをリードする立場にある者の間に求められることは少ない。本研究の場合、クリスチャンユースをリードするリーダーの立場（役職等）は、研究者によって定義されたものではなく、研究参加者のそれぞれが、ユース期を振り返って、自分をリードする立場にあったと思われるリーダー的存在を選んでいる。本研究はあくまでもユースの視点から見た、リーダーとの個人的な関係性に関する研究であり、したがって、ユースによってリーダー的存在であると思われた側に、自分はユースのリーダーであるという自覚があったかどうかについては調査されていない。上記のような相違点が指摘される時、当然そこには、心理カウンセリングにおけるカウンセラーとクライアントとの関係性におけるラポール形成の概念や研究が、クリスチャンユースと、彼らをリードする立場にある者との関係性に役立つのかという疑問も生じる。そういった有用性の吟味も、本研究の目的の一部であることを、ここで確認しておきたい。

3 グラウンデッドセオリーという方法

本研究は上記の目標を達成するために、質的研究の一種である、グラウンデッドセオリーという研究方法を用いる。質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてではなく、その質において理解し、研究する方法論を指す。質的研究の対局に位置する量的研究は、その名前からも判るように統計学的数量にサポートされたものでなくてはならず、ある意味非常に機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるのである⁽¹⁴⁾。さらに量的研究は、研究の客観性に重点を置き、実験的研究の構造や、仮説の証明過程を重視する方法論を多用する。一方の質的研究は、具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性の中で捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある。研究対象の量数ではなく、研究の対象となる事象を、いかに深く掘り下げるのが可能かという点が、研究の質として評価されるのである。

質的研究のアプローチを科学的な研究方法にまで押し上げた功績を持つのは、バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスの2名である。彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られ、データ収集、データ分析、理論構築という3つの主要な段階から成り立っている⁽¹⁵⁾。本研究ではマイケル・クイン・パットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods*に記述されたガイドラインに沿って、自由記述、インタビュー、そしてグループディスカッションを用いたデータ収集が実施された。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとめ、または概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一旦バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業が必要となる。また、収集されたデータ内の諸概念を識別し、特性を発見したうえで構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にするためにコード（コードワード）を付ける作業であるコーディングが行われる。最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの特徴的な到

(14) Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 2002.

(15) Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 1998, p. 12.

達点とも言える。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」（地面、地べた）から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

質的研究は非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することが出来るという性質の研究ではない。時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者をとりまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。さらに質的研究は、カテゴリー化やコーディング、また分析等が、ある程度研究者の直感に左右される研究方法でもある。質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追いつめることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう。グラウンデッドセオリーはまだ比較的歴史の浅い研究方法であるが、近年では、心理学をはじめ、看護学、教育学、社会学、文化人類学等の学術研究分野における、ひとつの主流な方法論として確立されつつあり、21世紀の重要な知的リソースとなるであろうと目されている。本研究で取りあげているラポール形成研究の性質を考えると、本研究の目的を達成するためにグラウンデッドセオリーが用いられることは妥当であると考えられる。

4 研究方法とその範疇

本研究では、パットンのガイドラインに沿って研究対象者を絞り込むために、均質サンプリング（Homogeneous Sampling）の方法を選択した。サンプリング（Sampling）とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることの出来ない質的研究において、より意図的（purposeful）に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリングとは、一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞

り込むことである⁽¹⁶⁾。今回この方法を用いて選択された研究対象者は35人の男女で、そこには以下の3つの共通点が存在する。

- (1) 自分をキリスト教信者であると認識する者
- (2) 高校を卒業して4年以内の者
- (3) ユース期（中高生の時期）に、自分をリードする立場にあったと思われる
クリスチャンとの間に、信頼感と安心感のある個人的な関係性があったと
認識する者

研究参加者の共通項を（1）としたのは、本研究のタイトルが示すとおり、クリスチャンのユースを対象とした研究を目的としているからである。研究参加者が自らを信者であると認識しているかどうかを尊重し、教会籍や洗礼の有無に関しては不問とした。研究参加者の共通条件を（2）としたのは、本研究の焦点であるユース期（中高生の時期）から年月があまり経っておらず、その時期の自分を比較的鮮明に思い出すことが出来る者を選ぶという意図からである。研究参加者の共通条件を（3）としたのは、ピアーからの影響を強く受けるユース期に、あえて牧師やその他のリーダーとのラポール形成に研究の焦点を当てるという意図による選択である。繰り返しになるが、本研究では、クリスチャンユースを導くリーダーの立場（役職等）を研究者が定義するのではなく、研究参加者のそれぞれが、ユース期を振り返って、自分を導く立場にあったと思われるリーダー的存在を選択している。本研究はあくまでもユースの視点から見た、リーダーとの関係性に関する研究であり、関係性を双方向から検証する研究ではない。さらに、本研究が対象としたユースとクリスチャンリーダーとの関係性は、一対一の個人的なものであり、リーダーのユースグループ全体に対するラポールの形成や、対グループのダイナミクスを吟味するものでもない。

研究参加者35人の教会背景は様々で、日本バプテスト連盟、日本基督教団、日本同盟基督教団、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団出身者等が含まれている。本研究では、情報データソースの多元化のために Triangulation of Sources の概念を用い、個人による筆記、個人インタビュー、グループディスカッションを

(16) Ibid., p. 235.

実施した⁽¹⁷⁾。筆記と個人インタビューでは、以下の2つの Open-ended Interview Question を用いて出来る限り自由に書くこと（発言すること）を促した⁽¹⁸⁾。Open-ended Interview は、半構造化インタビューとも呼ばれ、質的な研究におけるインタビューの質問が、誘導的な質問になることを抑制する役割を持っている。

(1)「あなたのユース期に、あなた個人との間に信頼感と安心感のある関係性を持っていた、あなたをリードする立場にあったと思われるクリスチャンの第一印象や、その後の関わり合いを思い出し、なぜその人との間の信頼感と安心感が生まれたのか、その理由について自由に書いて（語って）ください」

(2)「あなたのユース期に、あなた個人との間に信頼感と安心感のある関係性を持てなかった、あなたをリードする立場にあったと思われるクリスチャンの第一印象や、その後の関わり合いを思い出し、なぜその人との間の信頼感と安心感が生まれなかったのか、その理由について自由に書いて（語って）ください」

インタビューでは、上記の質問への自由な返答に対して、「それはどういう意味ですか」「もうすこし詳しく話してください」といった答えの明確化を促す質問、指導者との関係性のタイムラインに関する質問、また研究参加者と指導者にあった様々なコミュニケーション等に関する質問をフォローアップとして行った。グループディスカッションでは、筆記と個人インタビューで明らかになった「原因」について、グループメンバーの体験の中に共通項が見いだせるか等について自由に話し合うことを促した。

グラウンデッドセオリーはグラウンド、つまり事象の起こる現場から沸き上がるデータに基づいて帰納的に理論を構築する方法論であり、従って本研究は、キリスト教における「導く者」と「導かれる者」の関係性を神学的に考察することを主眼に置く研究ではなく、あくまでも実際の現場で起こった事象と、それを経験した者の証言に基づいて、ユースが持つ、クリスチャンリーダーに対する個人的な第一印象や、その後のどのような関係性が、彼らにポジティブな（またはネガティブな）影響をもたらしたかを検証するものである。またプライバシー保護の観点から、筆記、個人インタビュー、グループディスカッションにおいて、「リーダー的存在」

(17) Ibid., p. 247.

(18) Ibid., p. 342.

として語られる人物のおおまかな年齢と立場（教会等における役職やタイトル）以外に、その人物が特定できるような情報は、研究者にも、また他の研究参加者に対しても明らかにしないように念を押して要請した。

5 結果

本研究のデータ収集の部分（筆記、個人インタビューとグループディスカッション）が実施されたのは、2010年4月と5月で、場所は本研究の研究者が所属する大学、および東京近郊のクリスチャンユースの集まりの2カ所においてである。35人すべての研究参加者には、上記された2つの質問に対して自由に筆記することが促された。筆記された文章をもとに、その後グループディスカッションが始められた。グループディスカッションの司会進行は、グループの中からボランティアが選ばれ、ディスカッションの内容は研究者によって記録された。後日それらの参加者の中から、約1時間のインタビューに応じてくれた8人に対して個人インタビューが実施された。研究者は集められたデータを、回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング法を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。下記の (a) から (c) に関しては、比較的単純なデータの解析から明らかになった事項であり、(d) 以降は、カテゴリー分けやコーディング等から明らかになった事項である。また「個人的な信頼感と安心感のある関係性の形成」を、これ以降「ラポール形成」と呼ぶ。

(a) 指導者の年齢

本研究に参加した若者が、ラポールを形成できたリーダー的存在として挙げた者の年齢は、17歳から70歳で、そこには非常に大きな幅があった。研究参加者のユース期の年齢の2倍以上であったリーダーは約半数で、さらに50代、60代、70代のリーダーが計7人挙げられた。ラポールが形成されなかったリーダーとして挙げられた者の年齢も、下は19歳から上は70歳で、また50代、60代の者も複数含まれており、年代に大きな偏りは見られなかった。グループディスカッションにおいても、クリスチャンユースとラポールを形成できたリーダー的存在の年齢が重要事項として挙げられることはなかった。

(b) 指導者の立場

本研究に参加した若者が、ラポールを形成できたリーダー的存在として挙げた者には、教会の牧師、伝道師以外にも、教会の役員、日曜学校の教師、中高生会リーダー、一般信徒、さらには同じユースグループの先輩も含まれていた。またキリスト教系教育機関の教師や、上級生もリーダー的存在として挙げられている。ラポールを形成できなかったリーダーとして挙げられた者にも、同様に教会内外における様々な立場のクリスチャンが挙げられた。グループディスカッションにおいても、クリスチャンユースとラポールを形成できたリーダー的存在の立場が重要事項として挙げられることはなかった。

(c) 性別

立場と年齢には大きな偏りが見られなかったが、性別に関しては大きな偏りが見られた。女性の研究参加者が、ラポールを形成できたリーダー的存在として挙げた者の性別は、男女ほぼ同数であったのに対し、男性の研究参加者が挙げたのは男性のみであった。ラポールを形成できなかった指導者として挙げられた対象者の性別も、女性の場合はほぼ同数であったのに対し、男性の場合、挙げられた女性は2人だけであった。グループディスカッションにおいて、クリスチャンユースとラポールを形成できたリーダー的存在の性別が重要事項として挙げられることはなかったが、この偏りに対して考えられる理由については分析と立論の部分で取りあげることとする。

(d) 非言語コミュニケーション

インタビューの記録をカテゴリー化する中で、ラポールを形成できたリーダー的存在との体験と、形成できなかった存在との体験の双方に共通してまず明らかになったことは、対象者の顔の表情、視線、身振り等の、非言語のコミュニケーションに関するデータが非常に多かったことであった。非言語的な刺激に関するデータの量は、言語的な刺激に対するデータの量を大幅に上回っていた。データ解析を基に、コーディングのプロセスから明らかになった非言語的刺激や体験を、研究対象者たちにとってその重要度が高いと思われる順に以下にリストする。

表情

相手から受ける非言語刺激の中で圧倒的に多かったのは、表情、特にリーダーの

笑顔と、ポジティブな体験を関連付ける意見であった。研究対象者のほとんどが、グループディスカッションが始まる前の個人筆記の段階で、笑顔についてのコメントを多く記していたのには驚かされた。その後のグループディスカッションでも、その重要度をサポートする意見、特に「ポジティブな第一印象における笑顔の重要性」を説く意見が相次いだ。以下にいくつかの例を列挙する。

「いつも笑顔でうれしかった」

「目が合えばいつも笑いかけてくれて、オーラがいつも優しかった」

「笑顔でいてくれると話しやすい」

「いつも笑顔で、相手を大切にしていることが伝わって来ました」

「何もないときでもいつも笑顔で、すごく癒される感じだった」

「笑顔で暖かく迎えてくれる雰囲気があった」

一方で、ラポールを形成できなかった相手に関する記述や発言の中にも、対象者の表情とネガティブな体験を関連付ける意見が多かった。具体的には、笑顔が少ないこと、笑顔がないこと、表情が硬いこと、表情が無いこと（無表情）、目つきが怖いこと等が挙げられた。グループディスカッションにおいてもこれらが、リーダーとの関係性の中で、非常にネガティブに作用したことを語る声が多く聞かれた。同様にいくつかの例を列挙する。

「笑顔を見たことがなく、いつもむすっとしていた」

「笑顔が少なく、目つきが怖かった」

「表情が無表情でそっけない感じだった」

「表情が大抵むっつりしていて、ふてくされている感じだった」

「表情が常に怒っているようで印象を悪くした」

中には、笑顔とネガティブな印象を関連付ける発言もあったが、それらは例外的なものであったと思われる。以下に例を列挙する。

「笑顔というか、いつもニヤニヤしていた」

「顔は笑っていたが、目は笑っていないようだった」

「影のある笑顔で、疲れが見えた」

言葉や声の調子

表情の次に多く語られた非言語的刺激は、対象者の言葉や声の調子であった。言葉や声の調子を表す日本語には、「口調」や「語調」といった言葉がある。しかし「語調」には、話すときの言葉の調子や話すときの声の高さの変動、イントネーション、ア

クセント等に加え、「言葉つき」という言語コミュニケーションの部分も含まれている。「口調」は、口に出したときの言葉の調子や言い回しを指す言葉だが、そこにはやはり「言い回し」という言語コミュニケーションの部分が含まれている。ここで言う「言葉や声の調子」とは、声に出して語られるコミュニケーションの中の、非言語の部分、例えば言葉のスピード、トーン、音域等を指している。

カテゴリー化されたデータによると、「ゆっくりとしたスピード」と「はっきりとした話し方」の2項目がポジティブな語調口調として分類できると思われた。

「話し方はとても穏やかでフレンドリーでした」

「落ち着いて柔らかい話し方がいい」

「なんと言ってもらってもしゃべり方がとてもソフトだった」

「相手を大切にしている雰囲気や声の優しさなどから伝わってきたのだと思います」

「話し方がわかりやすく堅くない。表情も豊かでおもしろい」

ネガティブな印象を与える語調には上記の逆、すなわち「早いスピード」「はっきりとしない話し方」が挙げられた。ネガティブな印象を受けた「早いスピード」に、「キンキンした声」という情報を加えた者も複数あった。

「話し方がはっきりとしていなく、時々何を言っているのかわからなかった」

「コンパクトに隙無く話し、相手に話させなかった」

「いつもゴニョゴニョと話す」

「ものすごく早口で、他の人がゆっくり話しているとイライラしている感じだった」

「キンキンとした声が耳障りだった」

カテゴリー的には、言葉や声の調子と多少異なるが、言葉や声の調子に言語的内容も付随する形のデータ（いわゆる語調や口調）も多く見受けられた。「丁寧な話し方」「キレているような話し方」「命令口調」等である。フォローアップ質問で明らかになったのは、「丁寧な話し方」とは、具体的にはゆっくり、はっきりとした話し方に丁寧な語尾が加わる場合で、それはおおかたポジティブなものとして語られていた。また「キレているような話し方」とは、早いスピードに加え、丁寧とは言い難い語尾やボキャブラリーが、「命令口調」には、怖い印象を与える声のトーンに、実際に何かを強く促す言語的なコミュニケーションが、それぞれ加えられたものであり、それらは非常にネガティブな印象を複数の研究対象者に与えたようである。

視線、目つき

会話中の視線に関する言及も多くあった。ポジティブな目つきは、笑顔に含まれているようであった。視線に関しては、以下の例のように「目を見て話す」ことにポジティブさを感じるという意見がほとんどであった。

「話すときは誰に対しても目を見て話してくれてフレンドリーな感じがした」

「話すときは、いつも相手よりもかがんで話してくださった」

一方で、研究対象者にネガティブな印象を与えた視線や目つきに関して、以下の2例を挙げる。

「目がキョロキョロとしていて落ち着きが無い」

「目つきも悪く、印象は良くなかった」

「目つきが悪い」とは、極端に「目」だけが悪かったのではなく、顔の表情全体に対するネガティブな言及であると思われる。また少数ではあるが、「目が怖くてなかなか合わせられなかった」「目つきが悪く、怖かった」という発言もあった。対象者に「目が怖い」、また「目つきが悪い」という印象を持たれてしまった場合、目を見て話すことも、ポジティブには作用しない場合があると考えられる。

服装

服装に関する言及は、視線、目つき以上に多かったが、どのような服装がポジティブな印象を与えるかという点に関しては、統一された意見は見いだされなかった。ある研究参加者は、いつもスーツを着ていた牧師に対して「堅苦しい」というネガティブな印象を持ったが、他の参加者は同じような服装に対して、「きちっとしていて好感が持てた」と語った。常にラフな格好をしていたユースグループリーダーに対して、「だらしない」というイメージを抱いた者があった一方で、同様の格好をしていた教会学校の先生に対して「親しみが持てた」と語った者もあった。

(e) 言語コミュニケーション

非言語コミュニケーションに対して、言語コミュニケーションの占める全体的なデータの割合が少なかったことは上記したが、言語コミュニケーションそのものの中にも明らかな共通項が見いだされた。それは対象者から発せられた言語コミュニケーションに関しては、ネガティブなコメントがほとんどであったことである。以下に例を列記する。

「話しがとぎれてしまい、話しが続かなかった」

「否定的な言葉が多く、私も自分が否定されたと感じた」

「いつも自分の話ばかりをしていた」

「結構な毒を吐く」

「言葉に丁寧さが欠ける」

「話しにまとまりがなかった」

「ずけずけとものを言うのがいやだった」

最後の例に相反するコメントとして、「はっきりと指摘してくれるので良かった」というコメントもあった。

(f) 態度

非言語コミュニケーションと言語コミュニケーションの枠でカテゴリー化することのできなかった研究参加者の発言や記述を、ここでは「態度」というカテゴリーにして表したい。態度とは、「物事に対面したときに感じたり考えたりしたことが、言葉・表情・動作などに現れたもの」という意味の言葉である。たとえば「パーティーで彼はつまらなそうだった。」と表現する場合と「パーティーで彼はつまらなそうな態度を取った」という表現では、前者が、表面的な表情や動作に対する言及なのに対して、後者は、つまらなそうな表情や動作の裏に「彼」の「ものの見方」や意図的な「価値判断」が働いているという言い回しである。ここで言う「態度」とは、本研究の研究参加者が、それぞれ遭遇したリーダー的存在についての言及の中で、「リーダーのふるまいを、そのリーダーの考え方、価値観、または信念の表れとして表現されたもの」というカテゴリーである。

ポジティブな態度

リーダー的存在が、研究参加者に対してとった態度についての言及の中で、飛び抜けて頻度が高かったのは、リーダーが彼らに対して「はたらきかけ」をしてくれたというものであった。具体的にそれらは、「話しかけてくれた」「語りかけてくれた」「笑いかけてくれた」といった表現で、またそれらの前には、「私を放って置かず」「会うたびに」といった言葉が頻繁に付随した。話しかけられた結果として、「うれしかった」「大切に思われた」「打ち解けられた」という感想が述べられることも多かった。

またさらに、話しかけてくれた「話し」の内容に関して頻度が高かったのは、「最近どう?」「元気ですか?」「学校は楽しい?」といった、ユースの近況を尋ねる質

問であったこともわかった。グループディスカッションでは、「リーダーが話すために話しかけたのではなく、こちらのことを聞くために話しかけられた」という印象を持った研究参加者の感想が多く語られた。実際に、「話しかけてくれて、私の話をよく聞いてくれた」「向こうから私に興味を持ってくれた」という直接的な言及も多数あった。

またインタビューでは、リーダーが「いっしょに喜んでくれた」「共に悲しんでくれた」という発言もあった。グループディスカッションの話題にそれが上ると、指導者とのラポールの形成に非常に大切な態度であるという発言が相次いだ。ディスカッションにおける研究参加者の表情や口調、さらにはうなずきの大きさや頻度から、それらは非常に大切な要素であることが伺えた。

「〇〇ではなかった」という、ネガティブな態度の不在を示す言葉も、リーダーのポジティブな態度として頻繁に語られたが、それらについては、次項の「ネガティブな態度」で取り扱う。

ネガティブな態度

最も多く語られたネガティブな態度は、「上から目線」であった。グループディスカッションにおいて語られた研究参加者の言葉を用いれば、それは「最悪な態度」で、「すぐ心が閉じる」とのことであった。彼らの表情や口調、またうなずきの大きさや頻度から、多くがそれに賛成していることが見受けられた。上から目線についての具体例を求めると、インタビューや筆記でも同様に現れた、以下のような事柄が挙げられた。

「すごく偉そうな感じ」

「ものごとを決めつけて話す」

「自分の意見を押しつける」

「自分の意見を押し通す」

「頑固で否定的」

「自分ばかり話して、人の意見を聞かない」

「自分は知っていて、生徒は知らないみたいなことを思っている」

「自分が正しいっていう感じの話し方」

「正論ばかりを口にする」

「こちらの考えを否定する」

「意見を全否定された」

「いつもピリピリしている」

自分に対して「上から目線」を感じた対象の年齢は、20代から60代まで様々で、立場も牧師からユースグループリーダーまで様々であった。

ポジティブな態度に分類された、「話しを聞いてくれる」の反対形、すなわち「話しをきいてくれない」も、「上から目線」と同様に、非常にネガティブな態度として多く語られた。

それらの次に多かったネガティブな態度は「おもてうらがある」であった。具体的には、対象によって表情や口調を変える様子や、時折見せる陰しい表情などがこれに当たり、これも上から目線同様、非常にネガティブな感情を多くの研究対象者に抱かせるようである。「人を選んで接していた」「人によってあからさまに態度が違う」といった具体例が挙げられた。

上記以外には、少数意見として「感情的な態度」が挙げられた。人前で怒ったり、声を荒げたり、また感情的な態度に豹変すること等が挙げられた。「感情的な態度」の具体例として挙げられたのは、すべて「怒りの感情」であった。

* 比較早見表（内容の一部）

	ポジティブ	ネガティブ
表情	笑顔が多い	笑顔が少ない，無表情
言葉や声の調子	ゆっくり話す，はっきり話す	早口，はっきりしない話し方
視線・目つき	目を見る，視線を合わす	キョロキョロする
服装	－	－
言語（言葉）	－	否定的な言葉が多い，丁寧さに欠ける，まとまりに欠ける
態度	話しかける，聞く姿勢がある	上から目線，偉そう，自己中心，独善的，否定的

6 分析と立論

データの分析と立論に取り組む前に、もう一度本研究の目的とその範疇を確認したい。本研究は、研究参加者のユース期におけるクリスチャンのリーダー的存在との個人的な人間関係の中で起こった「ラポールの形成」について、グラウンデッド

セオリーを用いた質的研究を通して調べ、今日のクリスチャンユースに対してポジティブなインパクトを与えることの出来るリーダー像を模索するものである。ではクリスチャンユースとリーダーのラポール形成にはどのような効果が期待できるだろうか。上記したように、心理カウンセリングにおけるラポールの形成は、クライアントの自己開示を促し、自己開示は、有効な治療とヒーリングにつながる。同じように考えれば、クリスチャンリーダーとユースとの間のラポール形成は、ユースの自己開示を促し、自己開示は、リーダーからの適切なアドバイスや、ユースの信仰の成長につながる……という青写真を描くことが出来るかもしれない。ラポールの形成が、心理カウンセリングにおける二者関係の効果的な出発点であるように、クリスチャンリーダーとユースの関係性の有効な出発点になりうるのではないかという考え方である。本研究は他者への自己開示の前段階に位置する「ラポールの形成」に焦点を当てるもので、それ以降の関係性の発展や効果について深く吟味するものではないが、多くの研究参加者は、ラポールが形成されたリーダーとの関係性が、自らのクリスチャンとしてのアイデンティティーの形成や信仰の成長に非常にポジティブな影響を与えたと言っている。

本研究では「リーダー」という言葉を、広い意味で捉えている。今一度その意味を明確にすることによって、研究の範疇を再確認する。

(1) 本研究がとりあげるクリスチャンリーダーとは、研究者によって限定された役職ではなく、研究参加者がユース期に遭遇した、自分をリードする(導く)立場にあったと思われた者がそれに該当する。したがってそこには教会の牧師を初め、役員や教会学校の先生といった、様々な立場の者が含まれている。

(2) 本研究がとりあげるクリスチャンリーダーとユースの関係性は、あくまでも一対一の個人的なものであり、リーダーとユースグループ全体の関係性、またリーダーのユースグループに対するリーダーシップについて吟味するものではない。

(3) 本研究がとりあげる「ラポール形成」は、クリスチャンユースとリーダーの関係性の、「初期の段階」(第一印象も含む)に焦点が当てられている。したがって、長年に渡って徐々に形成される人間関係といった側面を検証するものではない。

グラウンデッドセオリーの性質や、その長所や短所をも踏まえたうえで、上記の研究結果の分析と立論に取りかかりたい。

(a) クリスチャンユースとの間の壁は、多くが思うほど高くない。

「ユース理解の難しさ」「ユースを導くことの困難さ」は、教会の内外で、特に中年期以降のクリスチャンによって頻繁にささやかれる言葉である。確かに多様化する近年の若者文化や価値観、また若者のボキャブラリーを理解することは容易なことではない。ユース文化は目まぐるしく変化し、様々なサブグループがひっきりなしに現れては消えていくという現象も繰り返して起こる。しかし一方で、本研究の研究対象者になった多くの若者は、それぞれのユース期にラポールを形成することができたリーダー的存在のクリスチャンに、自分より年上（祖父や祖母の年齢の対象者を含む）を挙げている。この研究結果は、「自身も若者でなければ、ユースとの間に良い関係を築くことはできないのではないか」というキリスト教会内にありがちな考え方に疑問を投げかけるものであると考える。クリスチャンリーダーの年齢を、ラポールが形成できない理由として挙げる発言は、研究の中で一切見当たらなかった。グループディスカッションでは逆に、ラポールを形成することができた牧師の年齢の高さを、ポジティブなものとして強調する発言も複数回見受けられた。高年齢のクリスチャンリーダーとのラポール形成を、若いリーダーとのそれより容易であるとするような発言はさすがに無かったが、少なくともリーダーの年齢そのものが、クリスチャンユースとのラポール形成の大きな障害となることは、本研究の結果からは考えにくく、したがってクリスチャンユースとの年齢の壁はさほど高くないと言えるのではないだろうか。

また本研究に参加した若者が、ユース期にラポールを形成したリーダー的存在として挙げた者には、教会の牧師、伝道師以外にも、教会の役員、日曜学校の教師、中高生会リーダー、一般信徒、さらには同じユースグループの先輩も含まれていた。それらすべてのリーダーが、たとえばユースに特化したトレーニングや教育を受けた者であったとは考えにくい。またユースとの間にラポールを形成することができるのは、教会やユースグループリーダーとして特別に任命された者だけということでもないようである。このデータが示唆するのは、どのような立場のクリスチャンでも、ユースとの間にラポールを形成することが可能であるということではないだろうか。

一方で、ラポールを形成できたリーダー的存在として挙げたクリスチャンの性別が、女性の研究参加者の場合、男女ほぼ同数であったのに対し、男性の研究参加者の場合は男性のみであったという研究結果には、現時点でもまだ多くの謎が残る。男性がラポールを形成できなかったリーダー的存在として女性を挙げているが、そ

の数は2名で、やはり女性の研究対象者と比べるとそこには大きな隔りがある。ユース期の男子が女性に対して持つ、思春期特有の苦手意識や、思春期の男子に対するクリスチャン女性の苦手意識等の存在の可能性を挙げることが出来るかもしれない。また本研究の男性参加者が、女性リーダーとの関係性を欲しなかったという可能性も残る。この結果に関しては、今後の研究課題としたい。

(b) 非言語コミュニケーション、特に表情と視線はとても重要である。

ラポール形成において非言語コミュニケーションを重視することは、心理カウンセリングの分野では非常に初歩的で常識的な知識である。林(2006)は、対人関係における第一印象の50%以上が、非言語コミュニケーションから形成されていると指摘している⁽¹⁹⁾。Tickle-Degnen & Rosenthal (1990)は、笑顔(smile)という非言語コミュニケーションの、ラポール形成におけるポジティブ性を繰り返し強調し⁽²⁰⁾、また西柳(2005)は、二者の関係性と視線量の相互関係を研究し、初対面の場合、視線が合わない相手に対して人は、より慎重な印象を持つことを示唆している⁽²¹⁾。心理カウンセリングにおける非言語コミュニケーションには一般的に、対人距離、凝視、身体接触、身体の向き、身体の傾き、顔の表出性、話しの持続期間、話しの中断、姿勢の開放性、関係性を表すジェスチャー、頭によるうなずき、声の抑制話す割合等が含まれている⁽²²⁾。本研究では、研究対象者によって、ユース期の彼らとクリスチャンリーダーとのラポール形成に重要な役割を果たす非言語的的刺激として、表情、言葉や声の調子、視線、目つきが挙げられたが、それらは上記のリストに含まれるものである。心理カウンセラーの多くが、クライアントとのラポール形成を築くことを望みつつ、自らの非言語コミュニケーションをコントロールするように、クリスチャンユースと向き合う者が、表情、視線、目つきに注意することは、やはり重要であると言えるだろう。

非言語コミュニケーションの中で、研究参加者によって特に強調されたのは、リ

(19) 林伸二「第一印象の形成」『青山経営論集』40(4)、青山学院大学経営学会、2006年、53-78頁

(20) Tickle-Degnen, L. and Rosenthal, R. (1990). "The nature of rapport and its nonverbal correlates." *Psychological Inquiry*, Vol. 1 (4), pp. 285-293.

(21) 西柳美香「面接場面において面識の有無と視線量の違いが印象形成に及ぼす影響と生理的反応について」『青山心理学研究』(5)(別冊)青山学院大学心理学会、2005年、13-16頁

(22) Patterson, M. L. (1983). *Nonverbal behavior: A functional perspective*. New York: Springer-Verlag. (『非言語的コミュニケーションの基礎理論』工藤力監訳、誠心書房、1995年)

リーダーの笑顔であったが、笑顔に対しては、以下のようなネガティブなコメントもあった。「笑顔というか、いつもニヤニヤしていた」「顔は笑っていたが、目は笑っていないようだった」「影のある笑顔で、疲れが見えた」作り笑顔や、無理をして作った笑顔は、ユースに見破られてしまうと言うことかもしれない。クリスチャンリーダーが、自分の笑顔が実際にどんな印象をユースに与えるかについて敏感になることも必要かもしれない。

(c) ユースに対して積極的に話しかけ、さらにゆっくりとわかりやすく話すことが大切である。

心理カウンセリングでは、多くの場合、クライアントは自ら望むか、または他者の助言や推薦によってカウンセラーのもとに向かう。またクライアントは、やはり多くの場合、カウンセラーは自分の話に耳を傾け、自分との関係性を築こうとする存在であることをあらかじめ認識している。一方クリスチャンユースとリーダーの間に、そのようなアレンジメントや理解があらかじめ存在することは少ない。ユースは、リーダーに話しかけられてはじめて、相手が自分に興味を持ち、自分との間に関係性を築こうとしていることに気づくのである。多くの研究参加者は、「はじめに声をかける」というイニシアチブをリーダーがとったことを、ラポール形成の第一歩と考えたようである。

また話しかけの際には、ゆっくりとわかりやすく話すことが求められている。非言語行動のうち音声に関するものは、心理学用語で「パラ言語」と呼ばれ、それは2つに大別される。1つは声の質であり、リズムや速さ、発音の明瞭さ、イントネーション、アクセントなどである。もう1つは発声法で、ひそひそ声、ため息、あくび、咳払い、声の大きさや高低、あいづち、間、そして沈黙もこれに分類される⁽²³⁾。パラ言語は音声で情報を伝える場合に、話す者の真意を表現する重要な役割を担っていると考えられており、心理カウンセリングにおけるラポールの形成において重要視されている。非言語コミュニケーションの一部として「言葉や声の調子」が挙げられたことはすでに述べたが、これはそれにあたる。ゆっくりとわかりやすく話すことは、ただ単に言語的インフォメーションをわかりやすく相手に伝えるだけではなく、それはリーダーの、人としての「フレンドリーさ」や「暖かさ」をユースに伝える手段でもあることが研究結果から伺える。心理カウンセラーの多くが、

(23) 西垣悦代『発達・社会からみる人間関係』北大路書房、2009年、144頁

与えられたカウンセリングの現場において、クライアントとのラポール形成を築くことを望みつつ、自らのパラ言語によるコミュニケーションに細心の注意を払うように、クリスチャンユースと向き合う者が、場所作りのためにイニシアチブを発揮してまずこちらから声をかけ、また言葉や声の調子を通して相手に安心感を与えようと心がけることはとても重要であると言えるだろう。

(d) ユースに対して何を話すかより、どう聞かかが大切である。

他者との人間関係作りがうまくいかず、対人スキルの欠如に悩む若者が日本には多く存在する。クリスチャンユースの中にも、同じような弱さや悩みを持ち合わせる者が多くいるであろう。アイデンティティーの形成が発達段階にあるクリスチャンユースがリーダー的存在と出会うとき、「相手から拒絶されないだろうか」「自分の気持ちを相手は受け止めてくれるだろうか」といった不安を抱くことも十分考えられる。クリスチャンリーダーは、ユースの持つそのような不安感の存在を認識すべきであろう。また思春期は、親やその他の権威者の欠点が目に付き、そのような存在に対する批判や反抗が始まる時期でもある⁽²⁴⁾。その時期に、新しい人間関係、特に自分よりも年齢が上の者との関係を築くのは容易なことではない。

クリスチャンユースにとってのリーダー的存在は、必然的に年齢や立場が彼らより上になるケースがほとんどであるが、そのような者との関係性の中で、研究参加者がユースの時期に最も苦手とした（または嫌った）態度のひとつに「上から目線」が繰り返し挙げられた。「上から目線」は若者の最近のボキャブラリーである。現代用語の基礎知識の編集者でもある亀井（2008）は、この言葉を以下のように定義する。

「上から目線：自分を上位とみなして、相手を見下す言動をさす。「うえから」と略して使われることも多い。尊大な態度をとったり、何かを決め付けてけなしたり、指示や命令をしたり、恩を着せるようなことをいうなどがそれにあたる⁽²⁵⁾」

本研究の研究参加者の多くによって「上から目線」的な態度として挙げられた具体例は、上記の定義に沿ったものであり、「一方的」「決めつけ」「否定的」といったキーワードが多く登場した。「上から目線」と同様に、ネガティブな態度として語られたのは、「話しを聞かない」であったが、「話しを聞かない」は、横柄な態度

(24) 後藤晶子『ライフサイクルからみた発達臨床心理学』ナカニシヤ出版、1995年、142頁

(25) 亀井肇「上から目線」<http://dic.yahoo.co.jp/newword?ref=1&index=2008000317>（リンク最終確認日 2010年9月16日）

として受け取られており、「一方的」「決めつけ」「否定的」等の表現と同列に並ぶ言葉として分類することが出来る。

一方で、ポジティブな態度として挙げられた「話しかけ」の具体的な内容に関する質問に対して明らかになったのは、それらの多くが、「最近どう?」「元気ですか?」「学校は楽しい?」といった、ユースの近況を尋ねる質問であったことであった。多くの場合「話しかけ」の内容は、リーダーから一方的に送られるインフォメーションではなく、リーダーからの「質問」であり、それは「話を聴く」ための「話しかけ」なのである。研究結果の (e) では、リーダー的存在から発せられた言語コミュニケーションに対して、ネガティブなコメントが非常に多かったことに言及したが、もしそれらの言語コミュニケーションが、リーダー側から一方的に発せられたメッセージとして彼らに受け取られたのであれば、彼らがそれに対してラポール形成を阻むものという感想を持ったことに必然性を認めることが出来るであろう。

クリスチャンリーダーが意図的に、ユースに対して「上から目線」で話すということは考えにくい、「ユースに教えてあげたい」「彼らに良いアドバイスをしてあげたい」と願うあまり、権威をも感じさせる強い言葉で語ってしまったことが、かえって思春期の彼らの心を閉ざし、ラポールの形成を阻害する結果になってしまうことは十分考えられる。福家 (2004) は、臨床心理学における面接法に関する記述で、ラポール形成のためにカウンセラーは、クライアントの話しに「一生懸命耳を傾け」そして「ひたすら聴かなくてはならない」と繰り返し述べている。それは「聴く」という態度が、相手にとってはカウンセラーからの「興味」や「受容」を意味するからである⁽²⁶⁾。心理カウンセリングのクライアントと同様に、ユースは自らが「受容」されたと認識してはじめてその心を開き、相手とラポールを形成し、自己を開示し、さらに相手に耳を傾けるようになるのではないだろうか。個人的な関係性の中で、クリスチャンリーダーがユースに「教え」、また「重要なアドバイスを与える」のは、ラポールの形成の後であるということを認識しなければならないであろう。

7 共感性の定義とキリスト教的理解

研究参加者の語る言葉に耳を傾け、またそれに呼応する心理学の諸研究に目を向

(26) 福家武人『現代の臨床心理学』学術図書出版社、2004年、80-81頁

ける中で、研究者が度重なる考察を迫られた課題があった。それは心理カウンセリングでのラポール形成において頻繁に用いられる「共感性」という言葉の、さらに詳しい定義を知ることの必要性と、またその概念が、キリストCHANによってどのように理解されるべきなのであろうかという2点である。すでに言及したように、「共感性」とは特にカウンセラーの立場からクライアントとの関係性を考慮する場合に重要な課題として頻繁に挙げられるもので、カウンセラーがクライアントの話を真剣に傾聴し、また語られる内容を真摯に理解しようという姿勢を指す言葉である。一般社会においても、「共感」という言葉は頻繁に口にされ、またキリスト教会においてもそれは、信仰者の持つべきポジティブな態度として語られることが多い。以下で、共感性という言葉のくわしい定義を探りつつ、キリストCHANがそれに対してどのような認識を持つべきかについて考察したい。

「共感」という概念に関する研究は、ドイツ人哲学者で心理学者のテオドル・リップスが用いた *emfühlung* という言葉によって始まり⁽²⁷⁾、米国人心理学者のエドワード・ティチナーがそれを *empathy* と訳して以降、さらに心理学の分野で広がっていった⁽²⁸⁾。*emfühlung* は、やはりドイツ語の *verstehen* と比較されて理解されることが多い言葉でもある⁽²⁹⁾。*Verstehen* が、相手に対する「理解」として訳されるのに対し、*emfühlung* は、「感情移入」や「自己投影」といった概念を持つ言葉である。すなわち共感するとは、単に相手を理解することではなく、感情も伴って、相手に対して一歩も二歩も進んで歩み寄り、相手と共にすることを指す。また英語の *empathy* は、やはり英語の *sympathy* と比較されることによって、その意味合いの明確化が計られることが多い。*empathy* が、「共感」や「他者に対する深い理解」という意味を持つのに対し、*sympathy* は、「同情」や「あわれみ」と訳される。すなわち共感とは、感情的に相手を察するだけでなく、理性的な相手の理解を含んだ言葉でもあると言える。米国の心理学者ロジャーズは、クライアント中心療法の説明の中で、この両者 (*empathy* / *sympathy*) を比較し、共感を

(27) Lipps T, *Grundtatsachen des Seelenlebens*. Bonn, Germany, Cohen, 1883.

(28) Titchener EB, *Lectures on the Experimental Psychology of Thought Processes*, New York, Macmillan, 1909.

(29) Wilhelm Dilthey, 1961-. *Gesammelte Schriften*. 15 vols. Leipzig: Teubner Verlagsgesellschaft.

カウンセラーの持つべき基本的な態度として強調している⁽³⁰⁾。さらに米国の教育学者ネル・ノディングスは、empathy という言葉を、engrossment という概念を用いて説明する。engrossment は、一般的には「専心」や「没頭」と訳されるが、英語では、occupy wholly または、absorb という意味を持つ言葉でもある。ノディングスは、共感を、「自らを他者に埋没させること」とであると語り、それは感情的にも理性的にも相手の身になって感じ、考え、また行動することであると述べている⁽³¹⁾。

では「共感性」は、クリスチャンによって、どのように取り扱われるべき概念であろうか。キリスト教会において、クリスチャンの持つ「共感性」という態度の重要性が語られるとき、最も頻繁に引き合いに出される聖書の言葉は、ローマの信徒への手紙 12 章 15 節であろう。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」というこの短い節に対して、教会の歴史上、様々な解釈が施されてきた。宗教改革者ルーターはその説教において（この節には直接的に触れていないが）、12 章 13 節以降の文脈の中から、当時の社会背景に言及しつつ、迫害されている者や、様々な誘惑の中で苦しむ者に対する、キリスト者の持つべき哀れみ深い、愛の態度のひとつの現れとして、共に喜び、共に泣くことの重要性を示唆している⁽³²⁾。宗教改革者カルヴァンは、ローマ書注解の中で、15 節はパウロが、キリスト者が互いに愛し合うことの真の意味と、その模範的態度を教えている箇所であると語っている⁽³³⁾。両者の聖書解釈に共通するのは、神の愛を模範とした、キリスト者間の相互愛である。

哲学的、心理学的、また教育学的な「共感性」の定義の一部を上記したが、多くの場合それらは学術的、または職業的な定義であり、特に職業的な定義は、技術論的要素の強いものとなる傾向にあると言えるかもしれない。しかし宗教改革者の聖

(30) Rogers, C. R. (1959). *A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework*. In S. Koch (Ed.), *Psychology: A study of science*, (Vol. 3, pp. 210-211; 184-256). New York: McGraw-Hill.

(31) Nel Noddings, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, Berkley: University of Berkley Press, 1984, p. 31.

(32) Martin Luther, *Luther's Works: Vol.25 Lectures on Romans*. Glosses and Scholia. Concordia Pub. Hou. 1972, pp. 461-463.

(33) John Calvin, *Commentary upon the Epistle of Saint Paul to the Romans*, Printed for the Calvin Translation Society, Edinburgh, 1844, p. 357.

書解釈と、さらには今日のキリスト者の多くも賛成するであろうクリスチャン的理解における「共感性」には、哲学的、心理学的、また教育学的な「共感性」の定義には含まれない、「愛」の概念が必ず含まれるのではないだろうか。

クリスチャンリーダーがユースと向き合おうとするとき目の前に現れるのは、社会が生み出す様々な歪みと、思春期特有の精神的葛藤の中にあって、傷つきやすい自我を持つ、ある意味ナイーブな存在である。クリスチャンリーダーは、自らの言動に細心の注意を払いつつ、彼らに歩み寄り、感情的にも理性的にも相手の身になって感じ、考え、ラポール形成を目指しつつ行動することが求められる。そしてクリスチャンとして、第二ペトロ1章5-7節に「信仰には徳を、徳には知識を……信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」とあるように、何にもましてそこに愛を加えなくてはならないのである。

8 最後に…

最後に質的研究の特徴をもう一度確認してこの研究を閉じたい。量的研究との比較で考える時、質的研究はその性質上、データ収集から分析に至るまで、研究者の主観が入る余地が残されており、またそれを抜きにしては成立しないものである。本研究は、マイケル・クイン・パットンによって示されたグラウンデッドセオリーの研究方法に忠実に実施され、研究者は細心の注意を払い、客観的なデータ収集、既存の研究との比較分析、そして立論の形成に努めたと自負するが、研究結果をある程度の信頼に値するものと見るか、あるいは客観性に欠ける駄論とするかは、当然意見が分かれるところであろう。繰り返しになるが、本研究は限られた数の研究参加者を対象にして行われているため、その結果を直ちに広く一般化することが出来るという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、ユース自身も、ユースをとりまく社会も、また研究者自身も様々な変化を遂げることから、研究結果の実際の有効期間も様々であろう。しかし一方で本研究は、第三者の推論や試論だけに基づくものでも、過度に一般化された人間論や文化論だけに基づくものでもなく、現象が実際に起こっている現場、つまり「グラウンド」(地面、地べた)から直接に得られたデータを分析し、そこから沸き上がるパターンや規則性を通して構築されたものであり、その結果は、最も現実に近いものである可能性を持っている。以前にも述べたが、質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデ

ータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして、また問題解決のひとつの糸口を見出そうとする試みとして活用されるべき類のものである⁽³⁴⁾。これから先このような研究が頻繁に実施され、クリスチャンユースの理解が深まり、彼らに対するミニストリーが情熱を持っておしすすめられることを祈りたい。

(34) 萱間真美『質的研究実践ノート』医学書院, 2007年, 3, 51頁